

■ 第3回懇談会の意見概要

	意見概要	反映資料
稲庭委員	- 機能、事業活動が整理されており、よくわかる内容になっている。 - ミュージアムの課題として多様な層の人に来てもらうことがあげられるが、市民の半分ほどが来たことが無い層となっている。エンゲージメントを作っていくなど取組の解像度を高めていく必要がある。また、この部分に人員や予算を強化していく必要がある。 - 諸室面積は非常にコンパクトと感じた。ピロティや半屋外など、パブリックスペースをどのように扱うかがミュージアムの人気を左右するので、余白の部分をよく考えるべき。	▶ 資料③④に反映 ▶ 資料⑤に反映
垣内委員	- 市民意見から「ともに創る」という声があるのは非常に重要。お客様ではなく、当事者として参加してもらい、資金面でも同じ意識を持ってもらうことも必要。 - 生田緑地ビジョンについてばら苑と文化的空間でどう調和を持たせるか、エリアマネジメントなども重要。他の施設とどのように連携していくのかは強い関心と期待が集まっている。「連携」を早い時期から緑地側・他館の状況もインプットしつつ行っていくべき。 - 展覧会を見なくてもふらっと入ることができる開かれたミュージアムを考えるべき。どこまで普通の人が入れることになるのか。また、旧施設の総括が必要でデッドスペースが多かったのでは。	▶ 資料②に反映 ▶ 資料⑤に反映
金子委員	「IN ACTION」はステップ0の取組みとして大切。候補地の生田緑地で「IN ACTION」の取組みができると良い。 - 規模を精査していく中で、「収蔵・保管スペース」「調査研究・デジタル化スペース」は展示資料によって決まってくる。全体面積が1万という数字だが、生田緑地になった場合、どのような制約があるのかを考えるべき。	▶ 資料②に反映 ▶ 資料⑤に反映
田中委員	「複製芸術」から「現代美術」に再整理しているが、現代美術はかなりざっくりとした言葉。これまでの活動を踏まえて発展させる考えが必要では。まちなかミュージアムの展開自体が融合の性質を持たざるを得ないのでこの部分を強化し、取り組むべき。 - 取組案は紙面の半分以上が特徴的な取組で占めているが、実際は基本的な取組がほとんど。バランスを考えていくべき。「IN ACTION」は、意識的にミュージアムが対外的に何ができるかを考える良い機会として考えて欲しい。 - 拠点施設の諸室は、まちなかミュージアムの検討と合わせてどのような選択と集中がなされたのかが分かると良い。	▶ 資料③に反映 ▶ 資料②に反映
八木橋委員	- 文化財の防災ネットワークとの安定的な関係を持ち続けることが必要。それ以外にも他の機関や大学、学会、市民といったネットワークと関わっていくことが非常に大切。 - 民俗的な資料は壊れてもいいのでぜひ貸し出して触らせるべき。あり方によって関係性は絶対に代わっていくので、まちなかと拠点に取組を分ける必要はないのでは。ステップ0の段階で柔軟な対応が必要になる。 - 諸室については他の施設との結びつきなど他で補完できるのであれば市民ミュージアムが担わないなども考えるべき。	▶ 資料②に反映 ▶ 資料④に反映
藤野委員 (公募市民)	- 拠点施設での取組は市民協働の意見を取り入れられていて良いが、市民側に求められているハードルが高いと感じる節もある。川崎市の小学生は「町探検」などを社会の授業で行うので、授業の成果がミュージアムの活動になっているような、気づいたら参加していたような低いハードルであれば巻き込みやすい。 - パブリックスペースは全世代が使える開かれた空間を整備して欲しい。隣接するばら苑も大きく言えばパブリックスペースになるので、検討が必要。	▶ 資料②に反映 ▶ 資料⑤に反映
佐藤委員 (会議後個別ヒアリング)	- 旧施設の収蔵庫は様々な種類の収蔵庫に分かれていたのは管理上良い点であったが、建築的には通路用の面積など非効率的な部分もあった。データベースについては管理の方法も含め検討していく必要がある。 - 八戸市美では企画展示室で展示が収まらない場合にコレクション用の展示室の一部も使っており、そのことに市民の不満がでている。対応策として2年に1回程度、企画展示室で大型のコレクション展を開催している。川崎も何年間かのスケジュールを検討し、諸室面積や使い方を考える方が良い。展示期間中に使用しない什器や可動パネル等を収納する倉庫スペースの検討も必要。	▶ 資料③に反映 ▶ 資料④に反映